

マリナー・ヴィオッティが カルメン初役

4月5日、チューリヒ歌劇場で音楽総監督のジャン・ドレ・ノセタ指揮、同総裁のアンドレアス・ホモキ演出のビゼー《カルメン》がプレミエを迎えた。若くして世界した指揮者マルチェロ・ヴィオッティの娘、マリナー・ヴィオッティが題名役デビューとなり、ヴェルディ《リゴレット》のマッダレーナ役に続く成功が期待された。

ノセタは登場後すぐに棒を振り下ろし、熱い前奏曲が始まるが、打楽器が走る。曲調が変わっても神秘感が出ない。普段着のドン・ホセ、サイミール・ビルグが歌劇場に迷い込んだという演出らしいが、最後まで帰結しなかった。合唱もオペラの観客として登場するが、その後の展開が不可解だ。ミカエラの人物像はていねいに描かれており、ナターリア・タナシイは好演した。ドン・ホセとの二重唱でも二人の心のズレを描き出した。カルメンは端正な歌唱だが、魔性もオーラも皆無だ。逃げる部分の演出もまったくスリルがない。《ジプシーの歌》は彼女の声の限界を隠すためか、遅いテンポで通す。ビルグは反対にドラマティックな高音のみで乗りきる。《花の歌》でもファルセットとのチェンジが不安定だったが、高音で帳尻を合わせた。間

奏曲も落ち着かなかったが、その直後によりやくオーケストラが歌い始めた。難産の末、最後はビルグの熱い歌唱で《カルメン》らしい情熱的な幕引きとなったが、すべてが空回りしているような、満たされない公演となった。

14日には「シュトラウス」と題された第



チューリヒ歌劇場《カルメン》から ©Monika Rittershaus

6回交響曲コンサートを聴いたが、ノセタはやはり重いオーケストレーションで光る指揮者なのだ。「交響詩《マクベス》」でしよっぱなから炸裂した。その後ディナ・ダムラウを迎え、《カプリッチョ》から《月光の音楽》モノローグ、休憩を挟ん

で、《セレナーデ》、《子守唄》、《明日》で匠のプレス・コントロールを聴かせた。最後は《インテルメッツォ》から「4つの交響的間奏曲」で、チューリヒの祭りで賑わう日曜の朝に、劇場に來た聴衆を後悔させない公演となった。

コンフルエンス音楽祭に 小菅優が登場

スイス人作曲家ファビアン・ミュラーと台湾人チェリストのピチン・チェンが、チューリヒの聖アンナ教会で2017年から主催するコンフルエンス音楽祭に小菅優が招かれ、4月11日に小菅のベートーヴェン《ピアノ・ソナタ第17番《テンペスト》》、メンデルスゾーン《無言歌集》から《ヴェニスの舟唄》、武満徹《雨の樹素描》、スクリヤビン《焰に向かつて》等の独奏と、後半はチェンのドビュッシー《燃える炭火に照らされた夕べ》、ラフマニノフ《チェロ・ソナタ》で幕を開けた。12日はアルメニアの音楽を紹介、13日はJ・S・バッハの曲で時間軸を超えた。前半は「バルティータ第2番」からの《シャコンヌ》を基にシモン・ブッハーがピアノで即興演奏し、ウクライナ人のヴァイオリニスト、ウラディ斯拉ヴァ・ルチエンコがオリジナルを弾く。最後は小菅がブゾーニ版をすさまじい集中力で弾ききった。後半はチェンが「管弦楽組曲第3番」のチェロを独奏すると、ブッハーがピアノ即興で返答する趣向で始まり、締めは第2ヴァイオリンに坪井悠佳、ヴィオラにポーランド人のフィリップ・ミハル・サフライ、コントラバスにブルガリア人のタシユコ・タシエフエが加わって、プロッホ「弦楽合奏とピアノ・オブリガートのための合奏協奏曲第1番」で楽しませ

た。今後の発展が楽しみな音楽祭である。
**スイスで開催された
オデッサ・クラシック**

2015年にピアノリストのアレクセイ・ボトヴィノフが故郷で始めたオデッサ・クラシックは、戦時中も他国を拠点として継続してきた。今回はスイスでも開催されることになり、4月4日、トーンハレでリトアニア文化大臣とリトアニア大使のスピーチ、クロアチア大使、オランダ大使、ラトヴィア領事、フィンランド領事も隣席の下、開幕した。モデスタス・ピトレナス指揮リトアニア国立交響楽団が生誕200年のスメタナの「連作交響詩《わが祖国》」より《モルダウ》を、精緻だがコンパクトに奏でたあと、NICOアンブルがヴィヴァルディ《四季》のリヒター編曲をロックバンドのように弾くと、会場中が盛り上がった。指揮のゲディミナス・ゲルゴタスは自作も歌いながら振り、彼らの世界を印象付けた。その熱さもあり、後半のシルヴェストロフ《讃歌2001年》と、ボトヴィノフのブラームス《ピアノ協奏曲第1番》はいまいち盛り上がりに欠けた。
チューリヒ・トーンハレ管弦楽団も4月10、11日にヤープ・ヴァン・ズヴェーデンの指揮、ルドルフ・ブッフビンダーのソロでモーツァルト《ピアノ協奏曲第24番》を演奏したが、ニュアンスに欠け、テンポも走る。アンコールのシューベルトはいつものように光ったので、指揮者と合わないのか。後半のバルトークはよかったが、冒頭のワグナー「《ニルンベルク》のマイスタージンガー」第1幕への前奏曲は輝きもリズム感もなかった。ピアノ協奏曲が不安なトーンハレの4月前半だった。